

木曽川

岐阜県山県市

ふるさとの街・探訪記

豊かな自然に恵まれた山県市、 その歴史と現状

エリア・レポート

伊自良開拓事業と鳥羽川の改修事業

気ままにJOURNEY

かけがいのない 自然や文化遺産を後世へ

歴史ドキュメント

明治改修前夜、新政府による治水行政の進展

TALK&TALK

『木曽三川分流の夜明け』

民話の小箱

美山の雨乞い

木曽川文庫は治水の資料館。

水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、

これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。

冬号は、長良川水系の河川が走る山県市から、

その歴史や開拓事業、河川改修を中心に、

歴史ドキュメントでは、

今回から「明治改修」をシリーズでお届けします。





豊かな自然に恵まれた山県市

その歴史と現状

丘陵地帯に囲まれた山県市は、正倉院文書にもその名を残し、市内には歴史を物語る文化財も所在しています。美濃の守護土岐氏との重要な関わりを持ち、美濃経営において拠点となっていた時期もありました。平成一五年には二町一村が合併して、山県市が誕生。安らから快適な二世紀の住みよいまちづくりを基本理念に、多彩なプロジェクトを推進しています。

丘陵に囲まれた岐阜市近郊の町

平成一五年四月、岐阜県山県郡の高富町・伊自良村・美山町の二町一村が合併して、山県市が誕生しました。平成の大合併では東海三県で第一号であり、山県市は岐阜県内で一五番目の市となりました。



写真提供：中日新聞社

空から見た山県市

山県市は岐

阜市の北部に隣接していません。市域には古城山（四〇七m）、釜ヶ谷山（六九六m）、北山（九〇七m）、舟伏山（一〇四〇）、日永岳（一二二六m）などの山々が連なり、山間を縫って流れてきた伊自良川・鳥羽川・武



儀川などの河川がそれぞれ盆地状の沖積地や河岸段丘・扇状地を形成しています。南部の高富地区（旧高富町）は鳥羽川に沿って形成された高富盆地に集落が発達しました。北部の美山地区（旧美山町）は、武儀川・柿野川沿いの僅かな平坦地のほかは森林で占められ、伊自良地区（旧伊自良村）は、伊自良川に沿って平坦地が広がっています。この川が地区の大部分で伏流しているため水不足が深刻な地域でした。

遺跡から見る山県市

市内には原始の人々の生活の痕跡がうかがえる九合洞窟遺跡や御所野遺

跡など縄文時代にはじまる遺跡が所在しています。これらの遺跡は武儀川が形成した河岸段丘上に位置しています。

美山地区の谷合にある九合洞窟遺跡は、武儀川右岸に流入する峡谷に南面する鍾乳洞にあり、縄文時代草創期から弥生時代までの遺物が多量に出土しています。土器や石器も豊富で、線刻石製品、骨角器も発見されています。

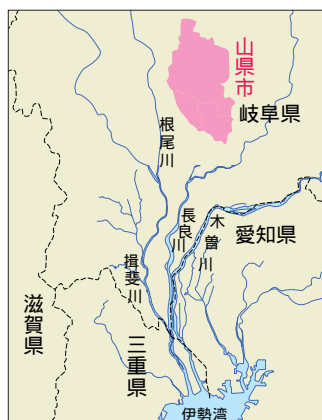
現存する古

墳は、市域南部の丘陵や段丘の端部に多く見られます。



九合洞窟遺跡と出土品

伊自良地区の大門口墳群、高富地区伊佐美の蛸田古墳群は、六世紀後半から七世紀前半にかけて造営されたと考えられる群集墳です。このほか、高富地区では七世紀前半から中頃の造営とみられる唐鋤古墳、



美山地区では、六世紀後半から八世紀までの須恵器・金環などを出土した中洞古墳が発見されています。

これらの多くは古墳後期に造営されたようですが、その造営主体となった集団により、この地域の耕地開発が始まっていたと推定されています。

正倉院に現存する戸籍

大宝二年（七〇二）の戸籍「正倉院文書」御野国山県郡三井田里によると、五〇戸をもって里を構成し、人口は八九九人男子四二九人、女子四七〇人、水田の班給額は二二五町歩内外で、この「三井田里」は現在の高富地区の高富・佐賀から岐阜市北部の岩崎付近と

ふるさとの街・探訪記

鎌倉・室町時代になると、大桑郷、西伊佐美郷などの国衙領や、伊自良荘・梅原荘・富永荘・西山口荘などの荘園

荘園や国衙領の成立

指定文化財となっています。

(一六〇六)の神鏡も保存されており、市

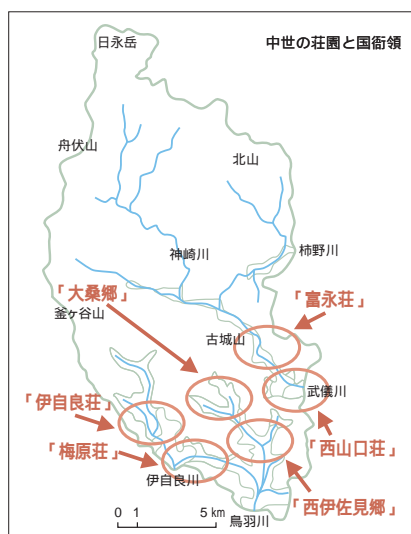


高木神社

豊臣秀頼が祈願して鑄造したという慶長一一年造(一六〇六)の神鏡も保存されており、市指定文化財となっています。

高富地区内の高木神社は、その社伝によれば、天平一五年(七四三)、加賀白山を開山した泰澄がこの地を訪れ、自ら観音像を彫刻してこの神社に奉納したと言われています。高木神社には、

考えられています。



進された荘園群の一つです。

嘉元四年(一三〇六)亀山法皇から皇女昭慶門院に譲られた一部で、高富地区伊佐見にありました。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

大桑郷を拝領し、その子孫は大桑氏を名乗るようになった。

時代には逸見大桑氏がこの地

職人の店が軒を並べていたよう

寺があり、被官の屋敷や商人・

が残り、近くには永正一四年

(一五二七)守護土岐政房が仁

岫宗寿を講じて開山した南泉

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡

跡には、霧井戸・馬場などの跡



南泉寺

土岐氏と大桑城

これらの荘園や国衙領は、いずれも地域のなかでは現在もまとまった耕地が所在しているところばかりであり、中世には古代にもまして耕地の開発が推し進められていったことがうかがえます。

版籍奉還

年(一八

六九)の

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還

版籍奉還



陣屋跡の碑

特産物の振興と流通

現在の地域社会の枠組みの素地が整いつつあった江戸時代、当地域の村々の多くは江戸幕府直轄地や尾張藩領に属しましたが一部で岩村藩領が展開しました。また、市域南部では一万石の小大名本庄氏の高富藩領が置かれ、幕末には高富の地に陣屋が移転されました。本庄氏は、宝永二年(一七〇五)から明治二年(一八六九)の版籍奉還

天文一一年(一五四二)、大桑城は齋藤道三に攻められ焼失、頼芸は尾張へ逃れました。

天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

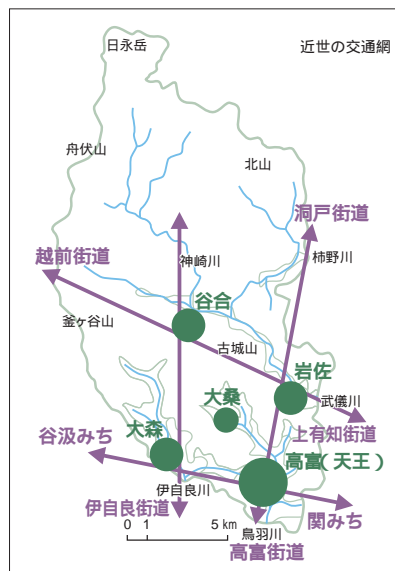
天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

天文四年(一五三五)、守護土岐頼芸は居館を置いた枝広、現在の岐阜市の長良公園あたりが長良川の洪水により壊滅的な被害を受けたため、大桑城へ本拠を移しました。

ふるさとの街・探訪記

近世における産業としては、中世から始まつた美濃紙の生産がさかんでした。特に武儀川・柿野川に沿つた村々はその村も紙舟役を課されており、耕作地の少ない山間部の主要な産業でした。市域北部山間部では、ほかに製材業や炭焼など森林資源を基盤とした生産が盛んに行われていました。これらの特産品を市域以南の消費地岐阜など平野部に輸送するために、南北交通路 高富街道・洞戸街道・大桑街道・伊自良街道 現在の国道二五六号や県道岐阜美山線と東西交通路 関谷汲みち・越前街道 現在の県道関本巢線や国道四一八号とが交差する高富、岩佐、大森、大桑、谷合などの交通の結節点には中心的集落が成立し、とりわけ高富・高木は現在も岐阜市以北の山間部地域の中核として政治経済上重要な機能を有するに至つています。




鳥羽川には古くから「百間堤」と呼ばれる堤防が築かれていました。伊佐美地区と東深瀬地区の境に東西に築かれた堤防がそれで、全長二五〇m余り。上流地区の雨水が注ぐ地点にあり、鉄砲水が東深瀬地区に流入しないようにするものでした。

ところがこの堤防にさえぎられた水は上流の地区に逆流し、排水を悪くしていました。このため、上下流の地区では利害が対立し、度々衝突していたようです。

百間堤がいつ頃築かれたのかは定かではありませんが、元禄二年（一六九九）の史料に「横堤」とあることからこの時、すでに築堤されていたことがわかります。

この百間堤は岐阜県近代化遺産として、人々の水との闘いを今に伝えていきます。

なお、一説によると、百間堤は水害を防ぐためではなく、戦国時代に大桑城主だった土岐氏が外敵を防ぐために築いた堤防であり、一朝有事の折にはここに水を貯めて防いだとも言われています。それを裏づけるものとして、今でも近くに「焼橋」という地名が残っています。



百間堤

鳥羽川の百間堤

現代の山県市とその展望

町 村 名																				年 月								
神 崎 村	田 原 村	片 原 村			椿 村	田 栗 村	笹 賀 村	徳 永 村	佐 野 村			藤 倉 村	大 森 村	小 倉 村	洞 田 村	上 懸 村	掛 尾 村	平 井 村	長 滝 村		赤 尾 村	伊 佐 美 村	推 倉 村		高 木 村	東 深 溝 村	高 富 村	明治十九年 当 時
北 山 村			葛 原 村	富 波 村	北 武 玄 村				乾 村	西 武 玄 村	下 伊 自 良 村			上 伊 自 良 村			大 桑 村				梅 原 村	富 岡 村		高 富 町	明治三十年 （一九九一年）			
美 山 村										伊 自 良 村										高 富 町					昭和三十年 （一九五五年）			
美 山 町																									昭和十九年 （一九六四年）			
山 県 市																									平成十五年 （二〇三年） 四月一日合併			



山鼎市誕生

明治から大正にかけての山県郡の主要産物は、米・麦以外では、養蚕が盛んに行われ、用材・板類・紙の生産も行われました。

明治二年（一八七九）、山県郡役所が旧高富村に設置され、高富は山県郡行政の中心地となりました。明治三〇年高富村は高富町となり、郡内で初めて町村制を施行しました、以後郡内村々との合併が進められ、昭和三〇年（一九五五）には高富町・伊自良村・美山村が成立。昭和三九年には美山村が美山町となりました。

そして現代、市域では南部を中心に開発が進み、一方で北部の人口が減少

大きく様変わりしてきました。

平成一五年の山県市誕生に伴い、「新市まちづくり計画」を策定し、交通網の整備などさまざまなプロジェクトを始動させました。豊かな自然を活用しながら、農林業を次代へとつなぐため、の後継者の育成や、森林保全についても推進しています。

また、東海環状自動車道・山陽
インターチェンジ（仮称）の建設
も計画されており、さらにこの東
海環状自動車道へのアクセス道
路として、国道二五六号、バイパス
の建設も進められています。この二つの

した広域交通網の層のまちの発展が期待されます。

このような多角的で計画的な開発を行うことにより、住みやすいまちづくりを目指します。



交通整備の構想

- 『伊自良誌』 昭和四八年 伊自良村
『美山町史』 通史編 昭和五〇年 美山町
『高富町史』 通史編 昭和五五年 高富町
『大桑城下町遺跡』
平成二三年 高富町教育委員會
『斧田遺跡』
平成一八年 山県市教育委員會
『二〇〇四 市勢要覽』 山県市 山県市

AREA REPORT

岐阜県山県市

伊自良開拓事業と 鳥羽川の改修事業

長良川水系の河川が走る山県市は、豊かな自然に恵まれた地域です。伊自良川の水源は、伊自良地区の釜ヶ谷山、鳥羽川の水源は、高富地区の古城山です。伊自良地区は水源を持ちながら、水不足に苦しみ、高富地区は、古くから鳥羽川の洪水に悩まされてきました。こうした窮状を克服するために、伊自良開拓事業と鳥羽川の改修事業が実施されました。

伊自良川の開拓事業

伊自良湖の完成で、地味豊かな近郊型農村へ。

水不足に苦しんだ伊自良地区

釜ヶ谷山を水源とする伊自良川は、伊自良地区の中央を貫流した後、岐阜市内で鳥羽川を合せて長良川に合流する流路延長約二五kmの河川です。

水源地の釜ヶ谷には豊富な水がありながら、伊自良地区内の大部分を常時伏流するため、年中水がない状態でした。さらに伊自良川兩岸の平地は、砂や砂利が多く含まれているため、雨水は地面の下に吸い込まれてしまい、また、礫層が深いため、地下水を汲み上げることも容易ではありません。

「いじら石

どこ、水のない村じゃ。嫁をやるのも一思案」と、伊自良をよく知っている人はこんなことをよく口



掛のため池

にしたそうです。水道が整備される以前の伊自良北地区ではほとんどの集落が谷間から湧出するわずかの水を竹の樋で引いてきて水船に貯めておき、人々はそこへ水を汲みに通ったのでした。嫁にくるとその水汲みが一苦労。井戸のある家も一〇mぐらいの井戸では少しの干ばつで干上がってしまう。中央の上願地区では、一六mも掘らなければならなかったそうです。飲み水でさえ、そんな状態で、農業をするためには、あちらこちらにため池を作り、使っていました。



水汲みの様子

開拓事業までの足どり

伊自良開拓事業が実施される以前の伊自良地区は、谷間や山裾のわずかな土地に作られた水田と、平地林の周辺の畑を耕作していましたが連年のよう

に霜害、干害を受ける面積が多く、生産力は極めて低いものでした。こうした農業経営の改善を願って、明治四三年（一九一）長滝地区で開田・利水事業が実施され、明治四五年に完成。この結果、取水の苦労もなく水田は実りのときを迎え、現在もこの集落ではその恵沢に浴しています。

困窮を極めた伊自良の生活

こうした厳しい状況下、伊自良地区は経済的に追いつめられ、新天地を北海道に求め、移住し



葉タバコの栽培

た人々も少なくありません。

また、その打開策として、葉タバコの生産が昭和六年（一九三一年）から開始されました。最盛期は昭和三〇年から三五年まで。岐阜県内では最右翼の地位を占め、毎年、品評会では必ず最優秀を受賞するほど、品質は優れていました。一時は、タバコ栽培をせぬ農民は農民にあらずとさえいわれたほどの勢いでした。しかし昭和三五年をピークに葉タバコの栽培は衰退します。葉タバコは連作に弱い作物だったことが原因です。

葉タバコと同様、県下一といわれた種なしすいかも同様の原因で、衰退しました。

このような経済状態にあるため、農業だけでは生活を維持することができず、冬期農閑期を利用して、山林を伐採し薪炭を生産して生活費を補充していたようです。ところが、年々山林は蚕食され、唯一の資源も枯渇状態となりました。

このため岐阜県は経済立て直しの指導に乗り出しました。まず釜ヶ谷の村有林数百町歩を



貯水池の堰堤工事（昭和36年）

水源涵養林として乱伐を禁じ、昭和二十七年から一〇箇年計画で植林計画を樹立し、農家の重要な生活補給源としての薪炭生産を一部犠牲にして、山林資源の育成に努めました。また、植林計画と前後して、伊自良川の砂防・河川改修にも着手。平時の伊自良川は一滴の水もありませんが、いったん豪雨に見舞われると、大洪水となりおびただしい土砂を押し流し、大きな被害をもたらすためです。

しかし、地域の経済的自立という意味からは、直接生産に結びつく抜本的な事業が必要でした。

伊自良開拓事業

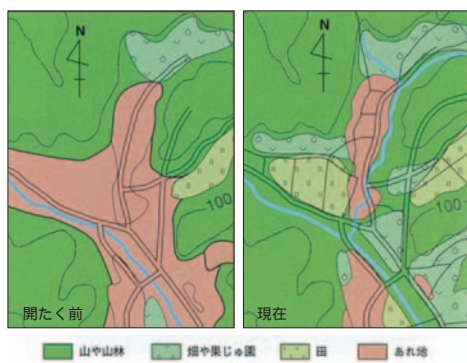


開拓用の用水路網

このように伊自良地区の土地利用は極めて貧しく、農業経営も低迷するばかりでした。この救済策として、伊自良川上流に貯水池を新設し、これを水源に山林原野を開拓し、併せては場整備を行い土地利用を増進して生産力の増強を図る伊自良開拓事業が計画されました。

農業経営にあえぐ伊自良地区の人々

開拓前と現在の土地利用の様相（平井地区）



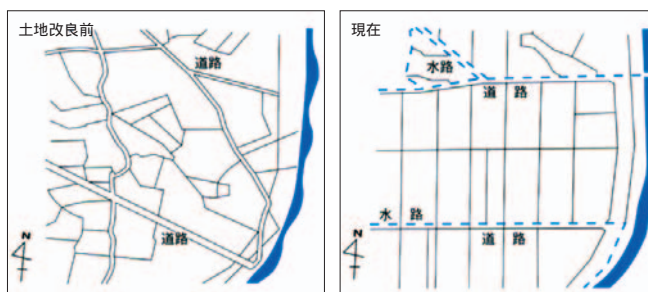
にとって、この計画は長年の悲願でした。これを実現するため、昭和三年開拓村民大会を開催。その後、幾度も話し合いの場を設け、議論を交わしながらやっと村民の意見をまとめあげ、国から計画が認められたのは、昭和三年三月のこと。昭和三五年一月には旧伊自良村役場前で、開墾の鉄入れ式が行われました。

昭和四四年には、念願の伊自良開拓事業用水溜池（伊自良湖）が完成しました。地上部分をロックフィルダム、地下部をグラウト工法による、湖水面積一〇ha、貯水量五四万立方メートル、灌漑面積一一〇haに及ぶ大規模な湖が誕生したのです。同年の一〇月には幹線用水路が、昭和四六年には支線用水路が完成し、荒涼とした原野は瑞々しい農地に生まれ変わったのです。

開拓後の耕地面積は五〇ha増加。その後の土地改良事業により、大型機械

の使える田畑になると、米作が盛んになり、イチゴやナスなどの野菜も大規模に作られるようになり、近郊農業を行う農村となりました。

また、風光明媚な伊自良湖を核とした観光開発が行われています。



土地改良前と現在の土地利用の様子・掛地区（旧伊自良村役場調べ）



伊自良湖

参考文献
『伊自良誌』 昭和四八年 伊自良村
『わたしたちの山県市』
平成二六年 山県市教育委員会

鳥羽川の改修事業

地域が求める鳥羽川
後世に受け継ぐ鳥羽川を創るために

鳥羽川のあらまし

鳥羽川は高富地区北部の古城山を水源とし、高富地区内で椎倉川・新川・石田川と合流し、岐阜市内で伊自良川に合流する流域面積六九・一五km²、幹線流路延長一五・七kmの一級河川です。鳥羽川沿いは盆地状の平地を形成し、水田や住宅地として利用されています。



鳥羽川の堤防と下をくぐる新川

り、鳥羽川の改修を始めました。

寛文（一六六一）八月には、鳥羽川の川浚えを行い、また、新川を掘削して川の流路を掘り替えました。しかしこの掘替はあまり効果がなく、元禄一七年（一七〇四）二月に三カ村組合により新川を延長、同年八月には公儀普請により、さらに新川を延長しました。こうした改修の後も流入する土砂によって鳥羽川は塞がれがちで、川浚えを絶えず行わなければなりませんでした。

濃尾地震と鳥羽川の伏越し

明治二四年（一八九一）の濃尾地震では、根尾谷断層の活動により、断層北側の東西深瀬集落に大規模な陥没が起こり、南側にあたる高木集落は隆起しました。それにより、それまで鳥羽川に流れ込んでいた猿渡川や三田又川の水が鳥羽川に流れなくなってしまうしました。このため、断層北側は一時湖水化し、湛水状態は三五日間続きました。

この溜まった水を流しだすために、鳥羽川の下に新しい川を開削してぐらせ、新川には排水機を設置しました。これが鳥羽川の伏越しと呼ばれるサ



鳥羽川の伏越しと新川の排水機

イホンです。

なおその後進められた土地改良事業によって、断層はほとんどわからなくなりました。

九・一二豪雨と鳥羽川改修

昭和五一年（一九七六）九月八日に降り始めた雨は台風の影響を受けて二二日まで降り続き、五日間で九八九mmという記録的な豪雨となりました。これにより高富地区の各地で崖崩れや洪水が発生し、床上浸水七四三三帯、床下浸水九四三三帯、総被害額四七億五千万円という大きな被害を受けました。



9.12豪雨直後の様子

江戸時代以降、幾度となく河川改修が行われた鳥羽川ですが、九・一二豪雨のような記録的な豪雨になると、その被害は甚大で、早急な治水事業が急務でした。このような背景から、地域住民が安心して暮らせる川を目指し、鳥羽川の改修を実施しています。河床掘削、流路の拡幅などにより、大幅な治水面の向上を図っています。

美しい鳥羽川を創るために

度重なる水害と治水事業を繰り返してきた鳥羽川ですが、オイカワ・ニゴイ・カマツカ・キンブナ・タイリクバ

ラタナゴなど、多くの魚類が生息する河川です。一方ホタルも生息し、高富町のホタル」として天皇家陛下に献上するほど有名でした。

この豊かな自然を守るために、山県市は第一次山県市総合計画を策定し、ホタルの保護をはじめ、希少動植物の生息できる環境の維持・回復・創出に努めるほか、鳥羽川や伊自良川の河川改修とあわせて、自然環境に配慮した親水空間や遊歩道、その他自然学習の場の整備を計画しています。また、環境パトロール員による定期的な監視を進めると同時に、環境保全監視員をはじめ地域住民との連携を図りながら、不法投棄の抑止および景観の保全に取り組んでいます。

「鳥羽川の川づくり」は、人々の暮らしを守る、強く、しなやかで、美しい川づくりです。

地域が求める鳥羽川、後世に受け継ぐ、鳥羽川を創るために、山県市と市民が一体となってさまざまな活動を推進しています。



鳥羽川のホタル



鳥羽川のさかな

参考文献
『高富町史』 通史編 昭和五五年 高富町
『大桑城下町遺跡』
『第一次山県市総合計画』
『第二次山県市総合計画』
『鳥羽川ワークショップからの提言』
岐阜建設事務所

気ままに JOURNEY

岐阜県山県市

かけがえのない自然や 文化遺産を後世へ

つすらと雪を抱いた山々、清らかな水をたたえた川の流れ…。豊かな自然が息づく山県市は、歴史の香りが漂う町。それぞれの町並みに、いにしえの営みを残しながら、今を生きる町。凜と建つ寺院やテニスパークを散策すれば、町を支える人々の息吹が聞こえてくるようです。

多彩な表情を追いかけて

東海北陸自動車道の関ICから約三〇分。ほんのりと雪化粧をした小高い山々が見えてくると、そこは山県市です。

奈良の正倉院に戸籍を残すこの町は、さまざまな表情を持つところ。紙漉きや薪炭を生産した山間の村々やその物資の交易路として発達した商人の町など、それぞれ違う表情を見せては

いますが、それでも深い関わりを持ちながら、長い歳月とともに歩いてきたようです。そんな山県市の豊かな表情を追いかけながら、車を走らせてみることにしましょう。



瀬見峡

旅の始まりは、史跡を散策

山県市の南部から中央部にかけて、ゆるやかな稜線を見せるのは古城山です。

ここは美濃の守護大名土岐氏が拠点を置いたところ。土岐氏がこの山に大桑城を築いたことから、古城山と呼ばれるようになりまし。山頂周辺には祠・石碑・ミニチュアの大桑城が点在し、その山麓には土岐氏ゆかりの南泉寺がどしりとした風格をみせています。

南泉寺から南へ車を走らせれば、うつそとした樹木に囲まれた白山神社が見えてきます。拝殿は、文亀二年（一五〇二）の建造といわれ、国の重要文化財指定。簡素なたたずまいの中にも屋根のなだらかなご配や、四隅のはね上がった線が室町時代の特徴をよく表しています。この

近くには、平安時代に活躍した源頼光伝説が伝わる岸見神社、荘園時代の名残りを伝える



白山神社拝殿（国重要文化財）



加茂神社

加茂神社、天台宗の鎮守といわれる室町時代創建の神宮山慈明院など、数多くの文化財が点在しています。

平成八年から開始された大桑城下町遺跡の発掘調査は、こうした貴重な文化遺産を伝承し、活用しようというもの。土岐氏がどのような城下町を築こうとしていたのか、そんなことが解明される日が、きっと訪れることでしょう。

美味しい郷土料理に舌鼓

白山神社から北へ車を走らせると、桔梗塚が見えてきます。戦国時代の武将明智光秀は、山崎の合戦で死んだのではなく、ひそかに美山の中洞に落ち延びていた…。そんな伝説が残るのが、桔梗塚と呼ばれる明地光秀の墓です。

この辺りは、そんな落人伝説も、さもありません」とつなげるよ



桔梗塚

うな山間の里。豊富な山林資源と、山々を縫うように流れる清流を利用して、美濃和紙の生産が盛んに行われていました。

とはいえ、米が収穫できない土地柄のこと。人々はソバやヒエ・アワなどの雑穀を主食とし、換金作物として、茶・コンニャクなどを栽培し、辛うじて生活を支えていたようです。今では、ヘルシーフードとして脚光を浴びているこれらの食べ物、山の人々の暮らしから生まれてきたのでしょうか。

国道二五六号沿いにある、ふれあいバザールは、伝統食材の、桑の木豆を伝えていくと開かれたところです。

「桑の木豆」とはいんげん豆のことです。その昔、台風でも倒れないようにと、桑の木に豆のつるを巻きつけて栽培したことから、この名がつけました。養蚕が盛んだったことを物語るこの「桑の木豆」、平成一〇年度、豊かなむらづくり」で、農林水産大臣賞受賞



ふれあいバザール

山県市の祭り

柿野まつり

例年4月第2日曜日

垣野神社と清瀬両神社から、古式にのっとり御輿を担いだ大名行列が御旅所で出合い、神楽やからく人形舞を奉納します。

【開催場所】
山県市柿野 柿野御旅所



いじら湖さくら祭り

例年4月

伊自良湖全体が淡いピンクに包まれる春。ステージではカラオケ大会や日本舞踊・郷土芸能などが催され、バザーなども出てにぎわいます。

【開催場所】伊自良湖畔



イベントカレンダー

・いじら湖桜まつり	伊自良湖畔	4月
・柿野まつり	柿野御旅所	4月
・山野草展示会	高富公民館	5月
・ふるさとまつり	美山地域	5月
・百瀬水タタ祭り	百瀬水タタ祭り会場	6月
・美山いかだ川下り	武儀川谷合・青波	7月
・いじら湖夏まつり	伊自良湖畔	8月
・バンドでどん	四国山香りの森公園	8月
・ふるさと栗まつり	四国山香りの森公園	10月
・いじら湖もみじ祭り	伊自良湖畔	11月



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋IC → 東名・名神自動車道 (約30分) → 宮JCT → 東海北陸自動車道 (約40分) → 美濃IC → 国道418号 (約25分) → 山県市

名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 → 名鉄本線 (約45分) → 新岐阜駅 → 岐阜バス (約40分) → 山県市役所

お問い合わせ

山県市役所

〒501-2192 岐阜県山県市高木1000番地1

TEL 0581-22-2111 <http://www.city.yamagata.gifu.jp/>

瀬見峡と並ぶ絶景は、円原伏流水です。円原川の水がいったん地下に潜り、

美味しい郷土料理をべろりと平らげたら、神崎川が見事な景観を織りなす瀬見峡へ。キラキラ輝く水面、踊るように泳ぐ溪流魚、そして四季折々に見せる美しい自然。輝かしいほど透きとおった清水が、大小奇岩の岩肌をくぐりぬける様は、まさに絶景です。

を皮切りに、平成一年の「全国新食品生活コンクール」、平成二年の「食アメニティー・コンテスト」と三年連続受賞の栄誉に。フライにしてよし、お菓子にしてよし。その素朴な風合いから、お土産に好評です。そのほかにも、山菜や採れたての野菜、美山の「コンニャク」や「アマゴ・マス」の甘露煮など、特産物が盛りだくさん。隣接する食堂では、桑の木豆五目おこわ、手打ちソバを目玉とする定食が人気です。

伊自良湖で自然を深呼吸

山里だからこそ残される自然の美しさ。このほかに「グリーンプラザみやま」や「乳児の森」「みやまの森」など、自然を体感できるテーマパークが盛りだくさん。冬の風もなんのその、テーマパークをそぞろ歩けば、身体が芯までポカポカと温かくなるようです。



円原伏流水

再び、岩間から清水が流れ出ているのです。その美しさは、日

伊自良湖にほど近い「フラワーパークすいげん」も気楽に楽しむことがで

湖上に舟を浮かべ、釣りを楽しむ。伊自良湖のワカサギ釣りは、冬の風物詩です。かつて水不足に苦しんだ伊自良地区はこのダム湖を築造することで、息を吹き返したのですが、そんな足取りも今では歴史のなかに。風光明媚な伊自良湖は、アウトドアのメッカとして人気の的です。春には、伊自良湖全体が淡いピンクに包まれ、湖面に浮かぶ桜を見ながらボートを楽しむことができます。錦秋の季節もまた、息を呑むほどの美しさ。透きとおるような湖面と燃え立つ紅葉が、見事なコントラストを見せています。

湖上に舟を浮かべ、釣りを楽しむ。伊自良湖のワカサギ釣りは、冬の風物詩です。かつて水不足に苦しんだ伊自良地区はこのダム湖を築造することで、息を吹き返したのですが、そんな足取りも今では歴史のなかに。風光明媚な伊自良湖は、アウトドアのメッカとして人気の的です。春には、伊自良湖全体が淡いピンクに包まれ、湖面に浮かぶ桜を見ながらボートを楽しむことができます。錦秋の季節もまた、息を呑むほどの美しさ。透きとおるような湖面と燃え立つ紅葉が、見事なコントラストを見せています。



伊自良湖のワカサギ釣り

きるリフレッシュゾーン。大きな花時計を中心に、パターゴルフ場もあり、休日ともなれば多くの人々でにぎわいます。フラワーパークを散歩した後は、戦国時代建立の甘南美寺まで足を伸ばしましょう。心臓破りのような石段を上ると、八つ棟造りの本堂が姿をみせます。春になると樹齢三百年を超える大桜が名刹を彩るのだとか。竜伝説を残す東光寺もまた圧巻です。禅寺らしい凛とした雰囲気、境内に漂い、自然に背筋がピンと伸びるようです。

豊かな自然に囲まれているから、信仰も生活の中に根づいているのでしょうか。

沈みゆく冬の太陽が、山々をそして町並みを紅く染め上げていました。



フラワーパークすいげん

明治改修

第一編

明治改修前夜 新政府による治水行政の進展

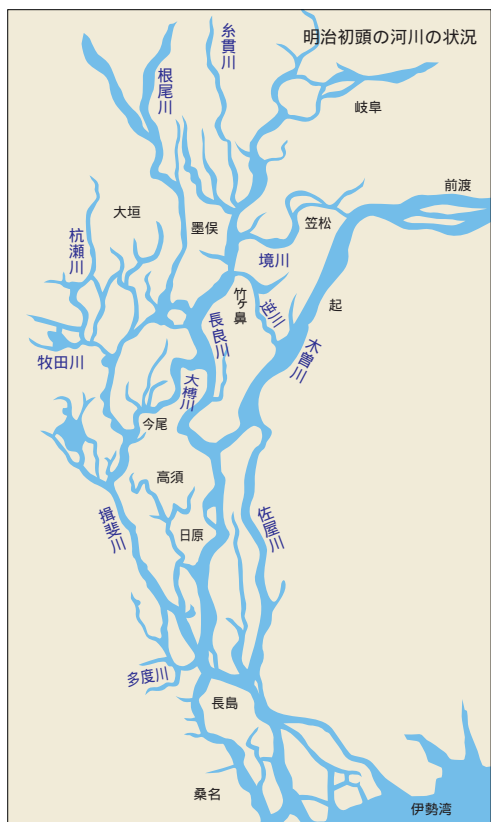
明治新政府の行政機構

慶応三年（一八六七）一五代将軍徳川慶喜が大政奉還を願い出たことにより、二六〇余年にわたる幕藩体制が崩壊し、新しい政府の誕生を迎え、慶応四年（一八六八）九月八日には、年号も明治と改元されました。

しかし、新政府が完全に機能するためには、明治四年（一八七一）の廃藩置県や、明治六年（一八七三）の地租改正

などの行財政全体の整備が必要でした。

地方行政の基本となる府県の区域は、当初は藩や直轄領がそのまま府県となりましたから、一時は一使北海道（三府：東京・大阪・京都）三百一藩県が誕生しました。岐阜県のうち美濃国では、幕府直轄領が笠松県となるなど、大垣藩・高須藩・加納藩など一〇藩県が出来ました。笠松県では、美濃郡代笠松陣屋を笠松県庁として使用しました。これらはその後、旧国・郡を単位として整理されましたが、木曽三川流域が現在のようになり、長野・岐阜・愛知・三重および滋賀の五県となったのは、第二次府県統合が行われた明治九年（一八七六）のことでした。



明治二年（一八六八）には、郡区町

国名	幕藩体制	明治2年 1869.7	明治4年 1871.7	明治4年 1871.11	明治5年 1872.11	明治9年 1876.8
飛騨国	飛騨直轄領	飛騨県	高山県	筑摩県	筑摩県	
美濃国	苗木藩	苗木藩	苗木県	岐阜県	岐阜県	岐阜県
	岩村藩	岩村藩	岩村県			
	郡上藩	郡上藩	郡上県			
	加納藩	加納藩	加納県			
	大垣藩	大垣藩	大垣県			
	野村藩	野村藩	野村県			
	高富藩	高富藩	高富県	愛知県	愛知県	愛知県
	今尾藩	今尾藩	今尾県			
	美濃直轄領	笠松県	笠松県			
	高須藩	名古屋藩	名古屋県			
尾張国	名古屋藩	名古屋藩	名古屋県	名古屋県		

廃藩置県による藩県の変遷

村編制法、府県会規則、地方税法の方法が定められ統一的な地方制度が整えられました。

国の行政機構は、総裁・議定・参与の三職制により始まりますが、目まぐるしい改変が行われ、行政機構の大枠が出来たのは明治六年頃（一八七三）でした。

治水事業を担当する部署として、治河使が明治改元直後の明治元年（一八六八）一〇月二十八日に置かれました。

江戸時代の木曽三川では、宝暦治水に代表される治水工事が数多く行われてきましたが、標榜した三川分流を実現することなく明治を迎えました。殖産興業を目指す明治新政府は、全国の大河川の改修工事に着手しオランダから技術者を招聘しました。木曽三川においても調査が開始されました。

明治二年（一八六九）には、二官六省制が成立し、民部省に土木司が置かれ治河使が廃止されました。明治四年（一八七一）七月になると民部省は廃止され、土木司は新設された工部省に移され、土木寮へ格上げされましたが、これは短期間のことで同年十月には大蔵省へ所属替えとなりました。

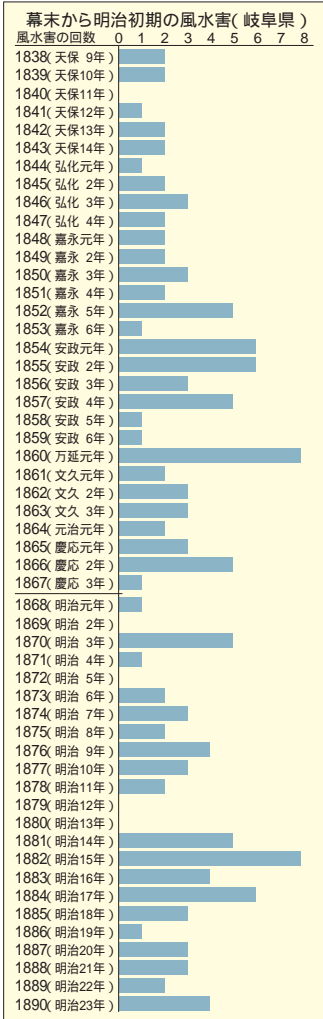
明治六年（一八七三）一月には内務省が設置され、翌年一月に土木寮が大蔵省から内務省へ移管されました。明治一〇年（一八七七）には、土木寮は土木局に改組され、初代の土木局長に石井省一郎が就任しました。



美濃郡代笠松陣屋跡（笠松県庁）

新政府の治水行政

河川工事の施行についても、当初では、政府は各藩県に対して幕府時代の慣例によって行えと指示していましたが、明治二年（一八六九）七月に民部省



幕末の天保年間(一八三〇〜四三)は、気温が低く干魃や大雪によって凶作の年が多く飢饉がしばしば発生しましたが、嘉永五年頃(一八五二)から

幕末の治水工事

明治六年(一八七三)八月には河港道路修築規則が定められ、河川の重要度によって等級が定められ、一等河では国が修築を行うこととされました。しかし、費用負担割合や工事の施行方法については明確に定められませんでした。政府は、国家の安定的な財源を確保するため明治六年(一八七三)に地租改正条例を發布し、明治八年(一八七五)二月に税制に関する大改革を行いました。これによって幕府時代からの慣例で治水事業費の財源とされていた国役金などは廃止されました。

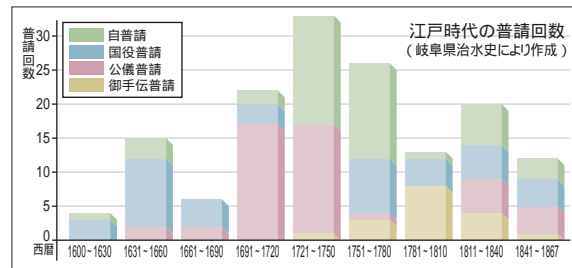
規則と府県奉職規則が定められ、これによって治水事業は民部省に伺った上で藩県などが実施することが明文化されました。ただし、大河川や重要な事業は政府から係官を派遣して藩県に協力して施行することとされました。明治六年(一八七三)八月には河港道路修築規則が定められ、河川の重要度によって等級が定められ、一等河では国が修築を行うこととされました。しかし、費用負担割合や工事の施行方法については明確に定められませんでした。政府は、国家の安定的な財源を確保するため明治六年(一八七三)に地租改正条例を發布し、明治八年(一八七五)二月に税制に関する大改革を行いました。これによって幕府時代からの慣例で治水事業費の財源とされていた国役金などは廃止されました。

一転して大雨が多く水害が多発するようになりました。

万延元年(一八六〇)の洪水は木曾川右岸で氾濫し前渡村、各務原市前渡東・西町を全滅させました。慶応元年(一八六五)の洪水は、再び前渡村で破堤し、境川筋にも大きな被害を与え、立田村船頭平(愛西市立田町)でも高潮により破堤しました。

このような水害が多発する時期にあつて、幕末の一〇年間の治水工事を見ると、岐阜県治水史には文久元年(一八六一)の御手伝普請、慶応二年(一八六六)の公儀普請。自普請では文久二年(一八六二)と慶応三年(一八六七)の

このような水害が多発する時期にあつて、幕末の一〇年間の治水工事を見ると、岐阜県治水史には文久元年(一八六一)の御手伝普請、慶応二年(一八六六)の公儀普請。自普請では文久二年(一八六二)と慶応三年(一八六七)の



木曾川前渡附近の現況河道



現在の石田猿尾

二件が記録されているのみです。宝暦治水(一七五三〜一七五五)をはじめとした江戸時代の数々の治水工事も、徳川幕府の権威の低下とともに、その数が低下してきているようです。

高まる木曾川改修の要望

このため宝暦治水頃から挑んできた木曾三川の分流は、江戸時代では完成することなく、まだ、三川が互いに入り乱れた状態で明治を迎えました。木曾川最大の派川であつた佐屋川の分派附近には、宝暦治水によつて築造された石田猿尾、岐阜県羽島市石田)が現在も残り、江戸時代の面影を止めています。

殖産興業によつて近代的国家の早期建設を目指した政府においては、物資の運搬のための輸送路としての舟運が重要でした。このため、明治初期の

国による河川工事は、舟運路を確保する低水工事が主に行われ、明治七年(一八七四)に淀川、明治八年に利根川、そして明治九年には信濃川で着手されました。木曾三川においても、明治政府に対する抜本的な治水対策の要求は、早くも明治元年に始まっています。明治元年(一八六八)一月には笠松県知事長谷部忍連が、木曾三川の治水について、河口部の開削、三川分流、水行奉行の廃止、尾張藩など諸藩の協力の必要性を内容とした水理論を、政府に対して建言し、政府もこれを認めましたが、大工事を着手するまでには至りませんでした。大垣で蘭学塾を開いていた大垣藩医の江馬活堂は、莫大な治水費を賄うため国債法を制定するよう提言しています。

明治四年(一八七一)になると、木曾川の治水工事に対する住民の声が政府へ届けられるようになりました。岐阜県と愛知県の輪中関係者からは、木曾三川分流工事を施行するようにとの上申がなされました。また、九月には、丹羽賢名古屋県大参事は、優れた技術をもっている外国人技術者を招聘して抜本的な治水対策を行うよう提言しています。明治六年(一八七三)には、岐阜県安八郡土倉村(海津市平田町土倉)の浄雲寺住職高橋証は、木曾三川改修に



浄雲寺の治水碑

ついで願出しました。これは川幅を木曾川三百間約五五〇メートル、長良川・揖斐川をそれぞれ二百五十間(約四五〇メートル)とし、河口まで分流するとの改修案で、現在の木曾三川の姿とよく似ています。

高橋示証の活動は同志とともにデ・レーケの派遣が実現するまで続けられ、後の「大垣輪中治水会」や「治水共同社」の創立に大きな力を与えました。

明治九年(一八七六)には、岐阜県本巣郡十八条村(瑞穂市十八条)の医師林俊篤が、底抜洲浚法(川底を掘下げる方法)による木曾川改修を岐阜県知事に建言しました。

高橋らは、さらに明治九年六月に治水之儀について、政府の最高機関である太政官の元老院へ建言していますが、この文中に、前回の建言を上申した結果、利根・淀川調査の後、木曾川の順序であると聞くと、至急調査の上治水方策を樹立されたいとしています。この頃には木曾川改修着手へ向けて前進していたものと考えられます。

《オランダ人技術者の招聘》

明治三年(一八七〇)二月、民部省土木司は笠松県に対して治水工事についての心得を通知していますが、その内容は判っていません。しかし、この年、土木司ではオランダ人技術者の招聘を決

定し、具体的な折衝に入っています。さらに、国による治水行政の充実については、前進していることがうかがえます。

明治四年(一八七二)二月には、土木司に検査係を置いて治水事業の統一を図ることとして、治水之規程を改正し、太政官布達として発布しています。

この布達には(一)千間(一八〇〇メートル)毎に定杭、百間(一八〇メートル)毎に小杭を置いて川敷を定めること。(二)水剎など流水に障害を与える工事は、自普請であつても土木司に相談すること。(三)堤防取締役を置いて三三(八)二キロメートルを一人の分担区域として、毎日河川の状態を点検させること。などのように河川の取扱を細部にわたり定めていることから、治水に対する政府の方針がうかがえます。

オランダ人技術者の招聘は、明治五年(一八七二)に実現しました。二月に長工師C・J・ファン・ドールンと二等工師I・A・リンドが来日しました。次いで、大阪港の建設などを目的として一等工師G・A・エッセルと四等工師ヨハネス・デ・レーケらが明治六年(一八七三)九月に来日しました。

このようにして、明治七年(一八七四)には、工師五人と工手二人の七人のオランダ人技術者が日本に滞在していました。

エッセルとデ・レーケは大阪に滞在して大阪港や淀川の調査を担当していましたが、淀川での粗朶工の試験施工や水源山地での砂防工事の施工などによって、日本の技術者に多くの技術を習得させました。



明治時代の河川水位記録

この頃になると政府の木曾川改修への取組が具体化してきました。明治六年(一八七三)四月一〇日には、井上馨大蔵大輔より岐阜県にたいして、量水標設置の為め、土木寮官員出張に付、水理心得の者差出し諸事打合との達しがあり、五月には木曾川の海西郡日原村(海津市海津町日原)に量水標を設置し、その後揖斐川筋今尾、海津市平田町今尾、木曾川筋海西郡森下村(海津市海津町森下)など各地に設置しました。

この量水標は、我が国では、ファン・ドールンの指導によつて明治五年(一八七二)四月、利根川の下総境町(茨城県猿島郡境町)に設置されたのが最初とされています。

また、明治六年五月には、木曾三川の測量が開始され、明治八年(一八七五)春までには一応完成したとされています。

《木曾川改修調査の始まり》

エッシャーとデ・レーケが淀川で試験的に施行したケレップ水制は、試験

区域の流れを安定させ期待どおりの成果をあげていました。このため全国から視察や技術習得のために淀川を訪れる人が多くなりました。

このようなオランダ人技術者の技術力が大きく評価されたので、とうとう木曾三川流域でもオランダ人技術者による治水計画の樹立を求める声が高まってきた中で、明治一〇年(一八七七)一〇月、三重・愛知両県の県令(現在の知事)は連署して、次のように内務省へ進達しました。

「木曾川は尾・濃・勢三国に涉り中間長良・揖斐の二川を合し、各派水勢異なるを以て古来水患を免がれず、加之近來土砂堆積、水勢横行、動もすれば河身一定せず、為に堤防を破壊し通船殆ど其便を失ふに至れり、…(中略)：…毎歳幾分の金を募集し更に治水の方法を設け度、就ては御省備の水理工師及本局官員出張検査の上、治水指示を受度此段相伺候候也」

これに対して、内務省は同年十月十九日付けで、伺いについては聞き届と回答しました。これによつて、ヨハネス・デ・レーケ(Johannis de Rijk)による木曾川改修調査が始まることになりました。

参考文献

- 『土木社会史年表』 昭和六三年 大木孝
- 『岐阜県治水史』 昭和五六年 岐阜県
- 『立田村史』 平成八年 立田村
- 『岐阜県史』 昭和四〇年 岐阜県地方気象台編
- 『木曾三川治水百年のあゆみ』 平成七年 中部地方建設局



木曾三川分流の夜明け

作家 三宅 雅子氏



三宅 雅子氏

大垣市在住。
・日本ペンクラブ会員・中部ペンクラブ参与
賞歴
・日本文芸大賞女流文学賞・中部ペンクラブ特別賞・土木学会出版文化賞・県芸術文化奨励賞・県芸術文化顕彰・大垣市文化連盟最優秀者賞・大垣市スイトピア賞・大垣市功労賞・東海テレビ文化顕賞・岐阜新聞大賞・土木学会映画部門企画賞・日本河川協会功労賞
著書
・『乱流』『熱い河』その他多数

一枚の写真から

私が明治政府のお雇い外国人であるオランダの水理工師ヨハネス・デ・レーケに出会ったのは、一枚の写真からである。

昭和五一年九月二日、長良川左岸が決壊。輪中堤に囲まれていた集落は



三宅が輪中展で出会った当時日本にあったデ・レーケのたった一枚の写真
京都不動川(日本初)砂防堰堤記念写真(オランダ堰堤)左から2人目は松方内務卿

浸水を免れた。逆に排水ポンプが設置されたから安心だと、輪中堤を崩していた集落は浸水した。洪水に浸された集落と、浸水を免れた集落とはまるで天国と地獄の差がある。人々はそれを見て、あらためて先祖の知恵である「輪中」を見直したのである。今こそ「輪中」の意識は高まっているが、昭和五一年ころは、明治改修以来六〇年間、大きな洪水が無かつたせいからすっかり気がゆるみ、「輪中」の仕組みも忘れかけていたのだ。それまでは有史以来、木曾三川流域は、人と水との闘いだった。多いときは、一年に二度も三度も洪水に襲われていた。明治改修以来、洪水の被害が激減したのは、データーにもあらわれている。

そこで、輪中をもう一度見直し、治水意識を持とつと、大垣市は「輪中展」を催した。輪中の歴史、文化、生活等きめ細かに展示さ



水位計 明治改修のときに使用 淀川資料館蔵

れた良い展示会だったと、今でも記憶している。その展示室の壁の片隅に、B4判ぐらいの大きさである一枚の写真が貼られていた。それもコピーである。その写真が、デ・レーケを中心にして日本の技術者が並んでいる京都不動川に築いた「オランダ堰堤」だったのである。私は写真の前で釘付けになった。写真の下に貼ってある説明書に、明治時代、木曾三川分流をした外国人と書いてある。(当時デ・レーケの写真は日本ではこの一枚だけだった)「あ、すごいではないか。有史以来、誰も三川分流を成し遂げたものはいない。誰だろう、どうして日本へ来たのだろ。何故地元の人でさえ、彼の名前すら知らないのか。等々私の作家意識が動いた。

最近の「SSO・第五九号」誌にも書かれているように、伊藤安男氏(花園大学名誉教授・大垣市在住)が、昭和四八年に高須輪中四二四名を対象にアンケートされたとき、平田鞆負を知っている人が三六三名に対して、デ・レーケはわ

ずか四名しか知らなかった。伊藤氏宅は私宅の近所に在るので、早速取材に伺ったが、デ・レーケと一緒に来日したエッセルの資料は多いが、デ・レーケは少なく、大阪の女性作家が、デ・レーケを書こうとして伊藤氏宅へ訪れたが、彼女はあきらめたのか、その後何も書いていないと言われた。又、作家の杉本苑子さんは、薩摩義士を書いた「孤愁の岸」で有名だが、日本ペンクラブ会長の尾崎秀樹氏から聞いたと言って、彼女から「お葉書」を頂いたが、「デ・レーケを書こうと思ったが、資料が無く断念した。地元の有利を生かして書いて下さい」と記されていた。

木曾三川分流の設計・プランの偉業を遂げながらも、かくもデ・レーケの写真も資料も昭和五〇年代には少なかつたのである。こうして私は、オランダへ取材に飛ぶことになる。

デ・レーケ来日のいきさつ

デ・レーケ一家(妻・子供二人・妻の

府とオランダ政府に要請した。

妹が長崎へ到着したのは、明治六年（一八七三）九月二日だった。デ・レーケ三〇歳、妻のヨハンナ二四歳だった。オランダから汽車でフランスのマルセイユへ。そこから船でナポリ、ポートサイド、スエズ運河を経てインド洋へ。さらにシンガポール、上海へと北上。そしてやっと日本へ到着したのだ。航路は三万海里（約五万六〇〇〇キロ）。二月月がかりの旅だった。長崎の出島で一泊した一行は、再び船に乗り大阪へ到着。当時の日本はチョンマゲ姿の男達も多く、腰にはまだ刀を差している者や、手に持つて歩いている者もいた。魔刀令が出たのは、デ・レーケが来日して三年目の明治九年になってからである。

デ・レーケはアムステルダム運河組合に雇われ、スヘリングワデーのオランダ工場の主任監督をしていたが、この現場に、内務省土木局の技師として出向して来ていたのがドールンだった。彼はこのときに現場監督のデ・レーケの仕事振りが気に入り、デ・レーケへ手紙を出し日本へ招聘している。

明治新政府は、近代国家を歩むためには、先進欧米諸国の科学技術が必要と考え、数多くの、お雇い外国人人を招くことにした。二九ヶ国から来日したといわれている。これらの、お雇い外国人人は、明治五年前後から、続々と日本へやってきた。治水・築港事業はオランダ人技師が招かれることになり、滞日八年、日本政府に信用されていたA・F・ボードウィン医学博士に人選を任せ、その結果、ファン・ドールン長工師（技師長）と、イ・ア・リンドウ（二等工師）の二名が選ばれて日本へやってきた。だが、日本政府が要請する調査を行うのには、ドールン達一名ではとても無理だと考え、さらに数名の技師を派遣してくれるように、ドールンは日本政

オランダの国土は、総面積およそ三万三千二百八〇平方キロ。このうち、およそ五分の一は平均海面下にあり、もし築造されている堤防が無いと、高潮に襲われた場合、全国土の半分以上、およそ一万七〇〇〇平方キロの土地が水に襲われてしまう。絶え間無い水との闘争が、オランダをつくりあげているのだ。デ・レーケの父親、ピーターも、祖父も築堤工であり、土木請負業者だった。父と母アンナには三男四女があり、デ・レーケは二男として一八四二年天保一三、ゼーラント州コリンズプラートで誕生した。

オランダ南部にあるコリンズプラートの町は、濃漁中心の集落だが、ライオン川河口のデルタに位置しており、集落は北海に面し、海岸堤防に囲まれている。このような出生の状況や家庭環境が、デ・レーケの水工技術に大きな影響を与えていたと考えられる。大学へは進学させてもらえなかったが、現場の仕事は少年時代からみっちり父親に仕込まれていた。生来利発だったのか、オランダ工場の現場監督のとき、水政省の技師で、のちに工科大学の教授となったJ・レフレッツに、数学と力学を学んだ。レフレッツは自ら教えを乞いにきたデ・レーケを高く評価し、測量や図面の引き方、流水の計算の仕方など水理学を教えたのである。

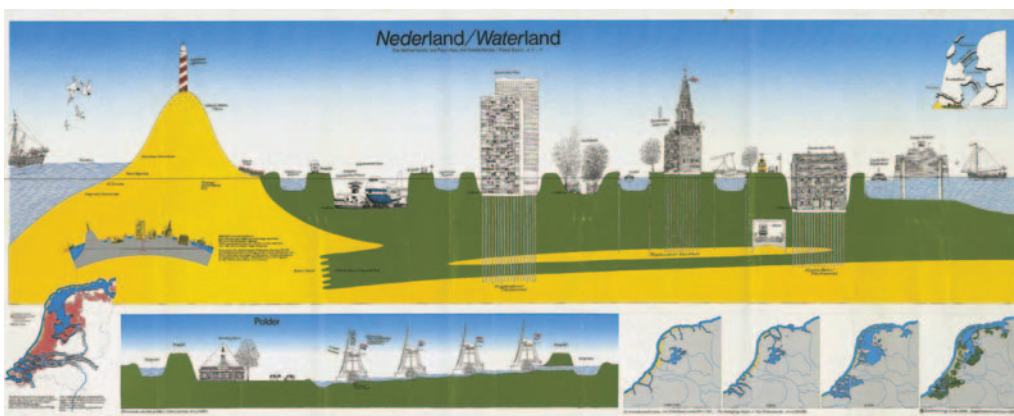
デ・レーケは晩年までもレフレッツを尊敬し、わが子たちを本国の学校へいれるときレフレッツの許へ送り込んでいる。レフレッツもよく面倒を見ていたようである。

現場の経験の上にこつした字問も身に付けたデ・レーケはアムステルダム運河組合に雇われ、オランダ工場の主任工事監督となった。そのときに知り合ったのが、土木局から来ていたドールン技師だったのだ。

日本での仕事

「今般日本政府ニ於テ国内ノ水里ヲ修治スル為メ大蔵省事務総裁参議大隈重信ノ命ニ依リ土木頭小野義真八蘭人イ、デ、レーケ氏ヲ撰擢シ取結ヘル條約如左」

日本へ到着してから半月後の一〇月一〇日、大阪で土木寮の局長である石井省一郎がドールン宅へ持参した雇用契約書を、デ・レーケは目にする。雇用契約書は第一〇條まで書かれてあった。明治六年九月一五日から明治九年九月一四日までの三年間契約。四等工師。月給三〇〇円、住居は無料貸与。雇用期間



オランダ海抜ゼロメートルライン図

中は土木寮の業務に専念し、他の業務を行わない事を義務づけられていた。その他、出張旅費は日本政府が給与するとか、日本国の政治及び宗法等に関係してはいけないとかの項目が細々と書かれていた。

その日から四日後にデ・レーケは正式に契約を交わしている。大体お雇い

外国人である連中は、三年、六年、長く九年度の契約更新をしながら働いていたが、デ・レーケの場合、それから三〇年間も滞在することになることは、本人も最初の契約のときには思ってもいなかったと思われる。各国のお雇い外国人人は多いときで五〇〇人ほどいたが、中には、酒に酔って仕事を疎かにしたり、素行よろしくない者もいたりしたが、オランダの技術者達は全部で一〇人來日したが、総じて真面目でよく働いている。

デ・レーケが木曾三川の視察に始めて姿を現わしたのは明治一一年二月二三日である。下流部にかけて三月六日まで踏査、『木曾川下流の概説書』として構想をまとめ、内務省へ提出している。來日してから六年の歳月が経っていた。その六年間は大阪で仕事をしていて、前述の石堰堤・土堰・石工床固めなど一六種の砂防工の試験施工を行っている。これは日本における近代砂防の始まりだった。

人々との関わり

平成一九年は、明治改修から一二〇年に当る。そのためこの『K&S』誌に私を含めて一〇名の学者や技術者が書くことになったが、私が第一回となるの

で、次の人たちは三川分流などのくわしい地形や技術の詳細を書かれると思つたので、私は一枚の写真からデ・レーケを追いつける事になつたいきさつや、彼が日本へやって來た経過を書いた。

平成元年、岐阜新聞に頼まれ、『乱流』と題してデ・レーケの半生を私は毎日一年間連載したが、のちに単行本として講談社から発行された『むろん、デ・レーケを描いた歴史大河小説としては、本邦初となる。それくらいデ・レーケの業績や人物像を、そのころは地元の人さえ知らなかったのである。

家族を連れて、異国の治水事業に自分の技術を発揮出来る大きな期待を抱いて來日したデ・レーケが、木曾三川の視察をしているときに、妻の妹、そして妻までも病気で亡くしている。失意に打ちひしがれながらも、仕事を投げ出さず、視察に歩いている。彼は長男も日本で亡くしている。やがて再婚して気を取り直す、他のお雇い外国人は次々と帰国していくなかで、彼だけが三〇年も滞在していたのは何故なのか。一説では子供達の教育費のためと言われている。

現場一〇〇回という言葉がある。文字通り私は書くに当たって、木曾三川の下流現場を一〇〇回、いやそれ以上訪れた。そして現場の様々な状況を知った。上流の方も、デ・レーケの視察行程通りの道をたどった。むろん駒ヶ岳も登った。この上流の視察でデ・レーケは、伐採さ

れた山が禿山になつているのを怒った。河川の横堰堤の指示を出したりしている。今でこそ山や森の大切さや、環境保全が叫ばれているが、デ・レーケはそのときすでに、山水一系の大切さを述べている。

デ・レーケが内務省の命で佐詰めになつて木曾三川分流図とプランを仕上げた大垣市に在る、玉屋を苦勞して探し当て、三代目の女将から証言をもらつたりした。

また、土木学会図書館から私宅へ電話が入り、明治改修の写真が四枚出て來たと言つた。早速見せて貰いに東京へ走つた。何と、私がデ・レーケを書いた岐阜新聞本社から北へ五軒ほど行つた場所にある写真館が撮影者だった。子孫は、おじいさんがそんな写真を撮っていたとは知らなかったと驚いていた。日本政府がオランダから買つた浚渫船の木曾丸と工事の写真である。おそらくデ・レーケの命で内務省が撮らせたのだ



デ・レーケが三川分流設計図を書きあげた「玉屋」の三代目女将と私



「孫のメリア夫妻」と私



「オランダの皇太子」と私（日蘭交流400周年）

と思う。デ・レーケは富山へ仕事で行つたときも山の写真を撮らせている。オランダの取材では、子孫のメリア夫妻とヤコブ夫妻にお世話になつた。そのお礼にヤコブ夫妻が來日されたとき、私宅へ招き、私の手料理で夕食を共にした。翌日の朝日新聞は、明治改修が結んだ友情と書いていた。

大阪港で、日蘭交流四〇〇周年記念が催された。私はデ・レーケの子孫や親類・関係者に再会する。夜のレセプションではオランダの皇太子と直接お話をする機会を得た。

日本に三〇年間滞在し、治水に貢献したヨハネス・デ・レーケを、歴史の上から扱えた事は、近代史を知る上でも大切な事だつたと考えている。



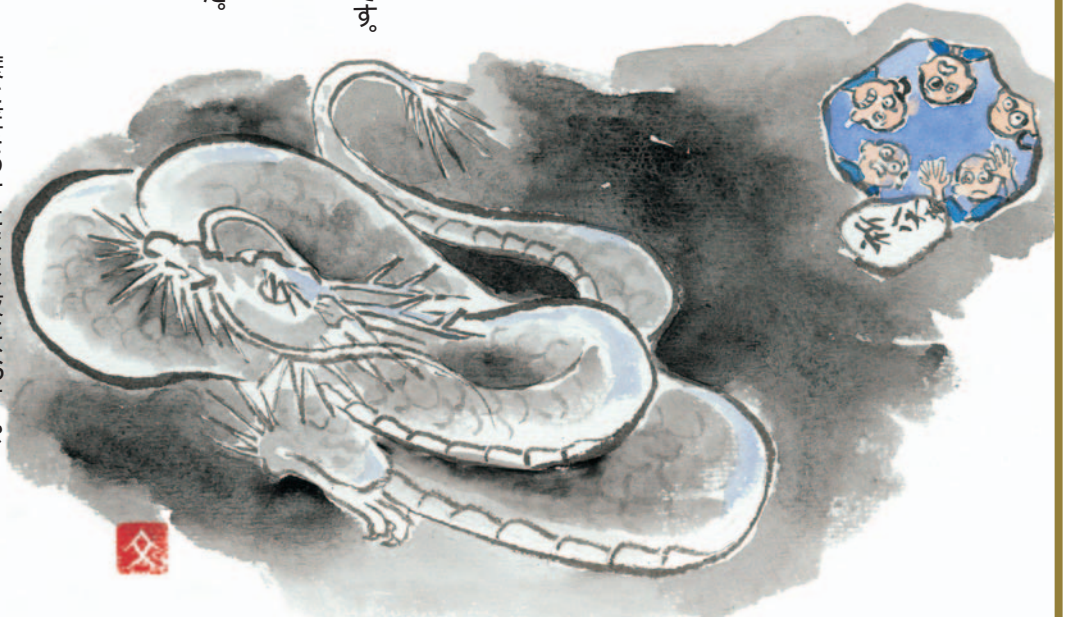
デ・レーケの親族・関係者（日蘭交流400周年）

参考文献・注
『岐阜県治水史』
『蘭人工師エッセル日本回想録』
『鑑修 伊藤安男 福井県三國町刊』
『ヨハネス・デ・レーケ書簡集』
『ヨハネス・デ・レーケ書簡集』
『ヨハネス・デ・レーケとその業績』
『デ・レーケとその業績』
建設省現国土交通省中部地方建設局
木曾川下流工事事務所刊

民話の小箱

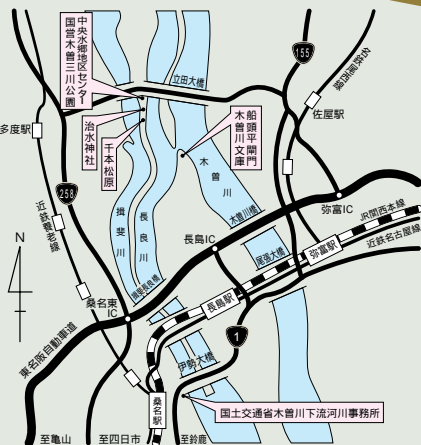
美山の雨乞い

美山の山里に住んでいた人々は、日照りに苦しめられていました。日照りは、暮らしにひびいてしまう大事です。人々は必死になって、雨を願いましたが、神さまにすぎるしか、道はありませんでした。神崎という集落の雨乞いは、夏坂の谷で行われました。太鼓の合図で村中の男たちが集まると、般若心経を唱えながら淵に行き、塩で清めた白い石を捧げるのが慣わしでした。そして、雨乞い歌をみんなで歌いながら、太鼓を叩き、踊ったりしました。この時、一升瓶いっぱいの水を八合分だけ、淵に注ぐのです。こうすると八合目の雨が授けられるのです。もし、一升全部注いでしたら、下流は大洪水になってしまつた。下流の村のことまで考え、この慣わしは続けられました。円原と今島の境にあるふじ金という集落も、同じやり方で雨乞いをしました。雨乞いを行う地点は、深い立六鍾乳洞。昔から竜王さまが住んでいると信じられていて、雨乞いの時以外は、村人は近づこうともしませんでした。日照りが続き思いあまって雨乞いを行う日には、河原から持ってきた石に「祈 八大竜王」と書いて、鍾乳洞に投げ込みます。石が落ちていく音がいつまでもたつても鳴りやまず、みんな、怖くて動けなかったそうです。音が消えてしまったら、鍾乳洞を取りまいて般若心経を唱え、天を焦がすほどの大きな焚き火をしたそうです。焚き火の回りで、太鼓を叩き、踊り続ける。



蓑と笠をつけたまま、夜になつても、息が続く限り、踊り続けます。すると不思議なことに、三日後には、お恵みの雨が降ってきて、大きな焚き火を消してしまします。「雨じゃ、雨じゃ。竜王さまが、雨を恵んでくださった」人々はひざまずき、雨とつれし涙にぬれながら、お神酒がわりの徳利の水を、鍾乳洞のなかにお供えたそうです。

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平間門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
愛西市立田町福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県山県市の皆様及び、三宅雅子氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

今回は、長野県上松町を特集します。ご期待ください。

宛先「KISSO 編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真 上左:甘南美寺 上右:古城山ミニ大桑城 下:雪山を抱いた山並み(美山地区)

『KISSO』Vol.61 平成19年1月発行

発行:国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL(0594)24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

編集:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976